

「中国—社会と文化」第五号（一九九〇年六月）抜刷

Japan

書評

ベンジャミン・A・エルマン (Benjamin A. Elman) 著

『哲学から文献学へ』 (*From Philosophy to Philology*)

ハーバート大学東アジア研究評議会 「ハーバート東アジアモノグラフ」二一〇

一九八四年刊 A5判三三八頁

吉田 純

## 書評

ベンジャミン・A・エルマン (Benjamin A. Elman) 著

## 『哲学から文献学へ』 (From Philosophy to Philology)

ハーバード大学東アジア研究協議会 「ハーバード東アジアモノグラフ」 110

一九八四年刊 A5判三六八頁

吉田 純

ベンジャミン・A・エルマン氏(一)の *From Philosophy to Philology: Intellectual and Social Aspects of Change in Late Imperial China* (『哲学から文献学へ—晩期中華帝国における変化の知的・社会的側面』)は、近代学術(考証学)の通論である。

本書はこの研究対象(二)の、現代的な視角・手法による通論として、観覧のきわめて少ないものである。ネイザン・シヴァイン (Nathan Sivin) 氏は、本書に寄せた序文の中で「総合的なものの提示を意図して書かれた本書から、若い学者たちが、それぞれの対象のより大きな見取り図 ("the larger picture") を、すすんで描いてみようとする勇気を得ることを期待する」という主旨のことを述べているが(三)、本書の清新な性格と意蘊をよく表わした言葉であると感ずる。

本書は、これから紹介するように全体の構成、研究の視角等にもユニークなものがあるが、また常に考え探案する著者の姿勢が、文章のすみずみにまで浸透し脈打っているような感があり、問題意識を鋭敏にして読めば、むしろ片言隻句に示されたその思索からも、

有用な示唆が獲られるのではないだろうか。

以下、本書の内容を要約する(ただし評者の関心から、細かな指摘でも取り上げた部分がある。また用語などを必ずしも原書そのままではないことをお断りする)。

## 1章「清朝におけるテキストールの革命」

著者は、宋・明理学と考証学の相違を、テキストールのちが(四) (此学というもののありかたの類型のちが)として捉え、宋・明理学から考証学への移行を、テキストールの革命と呼ぶ。テキストール (仏) "discourse", 「言説」と邦訳)という概念(五)そのものについて論じる力は評者に無いが、この概念の導入は、明学から清学への移行の客観的な説明として欠けるところがなく、警拔であると思ふ。

本書はいわば序論で、続く2〜6章で展開される論の要点を記した部分が多い(ここでは重複を避け、それ以外の内容から摘要する)。

著者は江南の三つの省の、考証学が行われた場を表わすものとし

て、「江南學術コミュニティ」(“Lower Yangtze academic community”)という概念を提示する(その表体は、3〜5章で述べられる)。江南三省の産業・経済の繁栄、とりわけ塩商の活躍が述べられる。

本章では、考証学の、統治権力との関係や政治性の問題について、さまざまな指摘がされている。

清代に政治色の薄い考証学が発生した原因は、滿洲民族の清王朝の言論統制だけではなく、適切な理由をほかに探さなければならぬというのが著者の立場である。また、清朝が徹底して取り締まったのは反滿思想であり、經学の学説などに干渉することは、ほとんどなかったと指摘する。そのような例として、『尚書』の偽古文を論証した閻若璣の学説をあげる。考証学が生起し学界を風靡してゆく趨向の全体を、著者は「考証ムーブメント」(“kao-cheng movement”)と表現しているが、尚書学の問題は、つづく各章でも繰り返し取り上げられ、著者はこの偽作説をめぐる清朝一代の尚書学を「考証ムーブメント」の、いわば尖兵と見なしているように見られる。

また、考証学者たちは經書の本来の姿を復元しようとしたが、これは体制教学である新儒学を否定するための根拠を獲ようとするとはかならず、その意味で考証学は政治性のある行為であったとする。

また考証学者たちが、文献研究に加えて、天文学・数学から治水術・干拓術などの実用学に関心をもち、果社会とのかかわりを保っていた旨を強調するが、この指摘は、評者にはとくに興味深

く感じられた。

く感じられた。  
本章で著者は、考証学がめざしていたものについて、要点を述べる。考証学は、六世紀間あまりの新儒学という覆いを取り除いて、社会秩序の規範(パラダイム)であり普通の真理とするに俾ずるものとしての、經書の本来のすがたを復元することを目的としたが、ほかならぬ「文献学」が、この「新儒学の解体」(“the unravelling of Neo-Confucianism”)、および「古」の復元の方法論であったとする。著者はさらに、この「聖人の真意を取り戻す」という志向から、疑いようもないはずの經書の權威を危うくしかねない文献批判の学风が生じたこともあわせて指摘する。また一種の進歩史観から、經書の復元が孔子の時代に構想された正しいありかたの社会の再現につながる、という考えを受け入れなかった学者もいたことを指摘して、王夫之や江永の例を挙げ、さらに考証学における学問進歩の観念にふれる(5章の要約参照)。

本章の最後に著者は、清代以後の學術史の正当な理解のためには、西欧近代文明の影響ばかりが強調されるべきでなく、その西欧近代文明の影響を偏りなく評価するためにも、アヘン戦争以前の中国の内側で進行した変化に眼を向ける必要がある、という主旨を述べている。評者はこの姿勢に賛同する。そして欧米派の著者による本書が、全書を通じてこの客観的な姿勢を堅持していることは、本書の特長の一つである。

2章「考証学として共通の認識論的パースペクティブ(epistemological perspective)の形成」

本章は、十八世紀以前の歴史のなかに考証学の起源をたずね、ま

た考証学の発展の軌跡を追う。以下、前半の主旨を要約する。

考証学は宋・明の新儒学を批判の対象としているが、一方で、考証学はその新儒学そのものから出たとも言える。十七世紀の閻若璣たちは、そのことを自覚し、また草創期の考証学を新儒学の枠組の中に受けこませようとした最後の人々であった。しかし十八世紀に入ると、そのような自覚は薄れた(本書は、十七、十八、十九の三世紀間の清朝考証学について、世紀間の変化を見出す視点が確乎としており、特に十七、八世紀間の対比が明瞭にされている)。

さらに起源をさかのぼれば、すでに唐の春秋学の中に、古典そのものへ回帰しようとする志向がある。十一世紀ころから、經学の中に懷疑主義的な傾向が出てきた。ついで、王柏らによって、文献批判を内容とする「辨」という論著(王柏『魯齋集』の「詩十辨」等「評考種」)も全盛になった。

清儒の多くは、明の王学左派を非難している。しかし王学左派が獲得した批判精神は、暗流となって後の清代學術に受け継がれているともいえる。

明末にはすでに、小学(「文献学」)の重要性が主張されはじめ、考証学の直接の基礎になった。その代表の梅賾、陳第たちは漢の学問を慕ったが、これはのちの「清朝漢学」のまきかけをなすものである。

明の後期までには、体制教学の朱子学や、その教科書の『四書大全』に対する不信感をきっかけにして、それまでの『四書』偏重に代わる、『五經』再認識の傾向が現われてきた。これは、そのころの学者がイエズス会士の紹介する西欧科学に触れたことと関係してい

よう。

このように、新儒学から考証学への移行は明末にすでに始まっているが、それに拍車をかけたのが明の滅亡であった。

以上のあと、著者は、明が滅び滿洲の清に征服されたことに衝撃をうけた中国知識人の反省を、大きく取り上げる。つまり、明が滅んだのは遺棄、知性の墮落の結果であり、その墮落は、それまで學術思想界を支配してきた「空談な道学」に責任があるとして、道学を糾弾しその区擇定としての学問を始めようとしたことが、考証学誕生の有力な動機になった、と言う。

著者は、異民族統治の清朝が朱子学を正統教学にしたことは、考証学派の性理学からの離反を強める結果になったと言い、一七五〇年にもなると、とりわけ江南の学界では、正統教学の經書解釈が真剣に取り上げられることはなくなったとする。

以下、著者は「漢学」の提唱など、十八世紀の學術界での、考証学の伸長を略述する。なかで、いわゆる「宋学」支持の立場をとり「漢学」派を論難した方東樹の『漢学商兑』が、ほかならぬ文献考証の方法をとっていることを例に、この時代、考証という方法は、特定の学派集団によって独占されたものではなかったとし、また『四庫全書總目提要』での古書の評価規準は、考証学のものに他ならないことなどを指摘する。

さらに、文字学・目錄学・校勘学、史学、また先秦諸子研究など考証学を構成する諸学の内容を略述するが、このうち校勘学については、「死校」「活校」などの術語を挙げ、その実際に踏みこんだ解説である。

また当時の自然科学分野の発展の様子と、それがあくまで経学の一環としてあったという限界などが述べられる。考証学の自然科学分野については、注意を怠りがちなところであるが、著者は全書を通じて、この分野に行き届いた関心を示しており、これは本書の特長の一つである。

3章「江南学術の職業化 (professionalization)」

本章と4章の分析視点は、本書に独自のものと言えると思う。すなわち当時考証学が行われたのは、どのような仕組みがあったからなのか、その、生計面から資料を確保する方法等まで多次元におよぶ仕組みのあらましが、社会学に通じる手法によって再現されている。この仕組みの総体が、著者のいう「江南学術コミュニティ」ということにならうが、本章では著者は、まず社会機構という側面から、「江南学術コミュニティ」のすがたを再現しようとしている。

考証学者の出身階層について、統計が示され、とくに商人(塩商その他)の出の例に注意した分析がなされる。

つづいて著者は、考証学者たちが、①長期の勉学と訓練で身につけたものによって、金銭や庇護のために技能的な仕事をしたこと、②宋・明理学では、学者は広汎な知的・政治的関心の有無を問われたが、考証学では専門分野の特殊技能の有無が問われるように変わったこと、③考証学に携わる者がそのような特殊技能を真えることが、考証学の出現、持続、伝承のためには必須であったこと、④考証学の存立を可能にし、それを保護した国家権力によって自治権を制約されていたこと、などを理由として挙げて、清の考証学は“professionalization”(職業化)・むしろ「専業化」と訳すべきか)

されたものであったという考えを示す。つづく論述は、このことを裏付けようとする方向のものである。

考証学を庇護するものがあつたことは、著者がそのように判断する一つの要件である。ここでは著者が、有名な徐乾学、阮元などの例とともに、朝廷がおこなった編纂事業等を一種の庇護と規定していることに注意が引かれる。

また著者は、清代には、学院が七れまでとは違った役割を果たしたとし、中国の学院は明の後期までには、科挙の予備校ふうのものとして政治的な統制集団との二系列に分かれていたが、やがて後者が一面で古典研究の論壇としての性格を持つようになったとして、復社から講筵会にいたる道筋を述べる。そして、やがてこの傾向を受けついで学院が、科挙の予備校ふうのものと拮抗する形で考証学の根拠地になっていったとして、江南各地方の名門書院の沿革、成員、また著名な考証学者たちのそこでの教員歴を述べる。

本章の最後で著者は、十八世紀には、知識人の生きかたの中に「専業」の学究という選択肢が現われたことを述べる。十九世紀の学究が教員・幕友として獲た収入額のあらましが示され、「官場」「専業」という世界とは別個の、学究としての生き方(それで生活の成りたつ)の興りを述べる。

4章「学問、文庫、書籍づくり」

本章は、考証学を行うことを可能にした仕組み(「江南学術コミュニティ」)のうち、古典研究に必要な文字資料がどのように供給されていたかの状況を再現したものである。これは、夥しい量の資料を駆使するという考証学の性格からいって、もつとも重大な関

心が払われなければならない問題である。ここで、その具体的な状況が相当程度系統だてて記述されていることは、本書の特長の一つであろう。江南の蔵書家たちと蔵書の公開状況、印刷と版元の問題―とくに自分自身考証学者であつて版元を兼ねる者が専門性の高い著述の公刊に果たした貢献、書肆と古書売買の状況、などが述べられる。

また、蔵書の蓄積にとまらぬ目錄学の発達を取り上げ、それに関連して、『四庫全書』の細目および孫星衍(孫氏同治書目)を例に、小学をはじめ従来補助学とされてきたものの強調など、考証学の価値観を反映した、四部分類の再編成のさまを述べている。

5章「江南における学問情報の伝達の諸相」

3、4章が機構的なもの、装飾的なものを取り上げているのに対し、本章で問題にされているのは、人間である。いわば3、4章は「江南学術コミュニティ」のハードウェアの部分を述べ、本章はそのソフトウェアの部分を論じたものと言えるだろうか。

ここではまず、学者たちが、学問に共通の目的をもつ同じ方法を共有し、既往の成果に自分の新知見を加えその累積の結果として考証学全体が進歩することを目標としていたといひ、著者の考証学観が主張される。そのような共通認識で結ばれたのが著者のいう「江南学術コミュニティ」であり、その共通認識を培った「江南学術コミュニティ」における人的結合のありさまを、本章で解き明かそうとする。

その具体的なものとして、著者は「礼記冊子」の蓄積と、書簡の効用を挙げる。書簡の役割を述べた箇所で、著者は劉台拱に言及し

ているが、本書が考証学の人的結合を「江南学術コミュニティ」という具体像の形に再現してみせたことにより、特に劉台拱のような人物―著者も拮抗する通り、生前に作物を公刊しなかったが、コミュニティ内の交流のなかで同時代の教多くの学者に影響を与えた―の存在感が新たに浮き彫りにされるという特長がある(五二〇―五二二〇四)。

また著者は、当時「筌前人所未筌」と言われるのが何よりの賛辞であつたことや、『訂』『補』と題する著作の多産に着目し、それらを著者のいう「累積的研究”(cumulative research)”としての考証学の性格を示すものであるとする。著者は閻若璩の『尚書古文疏証』を、以後の学者たちに、考証の方法がなされることの重さを開示したもの、と位置づけているが、その「累積的研究」という性格の例として、『尚書古文疏証』の公刊から清末までの尚書学と、古書学の略史を述べる。

さらに著者は、累積的な性格をもつ考証学では、学者たちが新知見のプライオリティの正当かつ正確な判定を求めようになつたとして、考証学の代表的なプライオリティ論を列挙している。

本章の最後で著者は、累積的性質の考証学が行われるなかで、学者たちには、(学問の場で)知識とは累積され総体として進歩の方向に向かうものだとする観念(いわば知識の進歩観)この用語評者)が行きわたつていたとする。この指摘については、さらに個別的・具体的な検討―知見の累積という事実を、そのまま学問の「進歩」として認識していたかどうかの問題―を含めて―が必要であると思われるが、考証学を支える学問観の問題に洞察を進め、その

一つをこのような表現で提起したことに、意義があると思う。

6章「終局」

本章は、江南に考証学がさかえた時代の、終局のありさまを記述する。

前半の内容は、十九世紀に入ってから、知識人たちの考証学批判による、考証学の内側からの変質であり、具体的には、今文経学の勃興、桐城派の方東樹らによる「漢学」批判、「漢宋兼採学」の提唱を概説する。

後半の内容は、太平天國の乱による、「江南学術コミュニティ」の瓦解である。古籍、著書（章学誠『史記考』など）、人材の損失が具体的に列挙され、また乱の平定後の蔵書の復旧事業についても具体的に記述する。

結語で著者は、考証学は旧い土壌から出たが、中国の知的状況がそれによって変容したことを強調する。その例として、甲骨の発見（一八九九年）のとき、それが、歴史古代史の研究に新時代を画したとされる甲骨研究に発展させた体勢ができていたのは、新たに導入された西欧近代科学があつたからでなく、考証学の伝統があつたからであることを述べて、全章を締めくくっている。

要約を終えたところで、本書の対象の捉えかたや方法にかかわる、大きな問題について二つ論じる。

一つは、本書の題名にもなっている『哲学』から『文献学』へ』という、思想史の捉えかたに関連した問題である。

『哲学』から『文献学』へ』の主旨は、明の滅亡と清の中国支配

に際会した知識人たちが、それまでの宋・明の理学（著者のいう「哲学」）のありかたを反省し、その反省を一つの大きな動機として、宋・明理学とは逐一の点で対照的な、その反摺定としての学、すなわち考証学（著者のいう「文献学」）が成立をみた、ということである。

ここではまず、これまで考証学を考えるうえで問題の核心と思われながら、具体的に示されることの少なかつた、考証学の動機（おもに清初における）について、一理の論が展開されている。

また、清の考証学は宋・明理学の反動である、という言いかたがあるが、その際に、両者の間の、いわば作用と反作用の関係が、詳細に説かれることは少なかつたように思う。しかるに本書では、『哲学』から『文献学』へ』を説明図式に、考証学の二つの特徴が、宋・明理学と克明に対比づけられることにより、考証学の、文字通り宋・明理学の反摺定としての確固とした像が、描き出されている。

『哲学』から『文献学』へ』(From Philosophy to Philology)という本書の標題を一見した読者の中には、その“From...to...”という表現のなかに、無意識のうち何らかの色づけ（たとえば「思想」の喪失、墜落など一むろん他の方向もあり得る）を予想し、それゆえに、この命題を自新しくないものと感じるむきがあるのではないだろうか（少なくとも評者は、初めそうであった）。

しかし、如上の『哲学』から『文献学』へ』という構図の全体を見おろして気づくことは、それが初めに予想したどのような色づけも含まない、文字通りの“From...to...”だということである。つまり、

本書の構図の中で、『哲学』と『文献学』は等価（見合うもの、対称のものという意味、価値判断のことではない）である。

このことは、著者が自身の対象領域を、『哲学』と『文献学』とを等価に扱おうとする境域として設定していることを示しているだろう。言い換えれば、著者の視角は、思想史の対象を、多重の位相からなりたつ人間の知的活動の広がりの中に開放して、その全体を貫流するハイマメントの転変―著者にとっての思想史―を眺つけようとするもの、といえるのではないだろうか。

このユニークな視角がなされることの可能性を、一定の果実として示した本書は、今後従来の思想史が補充され再検討されてゆく過程において、新たな視角の設定が求められる際に、一つの示唆を与えるものであると評者は考える。

宋・明理学と考証学の対比が明確にされる一方で、考証学の土台の一部は宋・明理学の中で培われてきた問題関心や方法の蓄積に他ならないこと（これは、著者の考証学研究において、当初から注視されてきたことからであると思われる）も強調されており、著者の『哲学』と『文献学』の関係の解釈は、いわゆる「図式的なものとは異なる。

しかし、『文献学』が『哲学』と極力対比して語られることの余波であるのか、『文献学』が無機的な技術学（この用語に語弊はあるが、今やむをえず用いる）と同義に近くなつて、『文献学』そのものが帯びていた精神性のこときものが、捨棄されているまらがあるように思えてならない。

たしかに、本書では繰り返す、考証学者たちにとって考証は

『古』の復元』という信条を實現するための手段として意味づけられていたむねが述べられており、その意味では、評者の批評は当たらないであらう。しかし、評者が言いたいのはそういう意味ではなくて、学問に向かうこと、それを究めようとするすがたから放たれる、熱気のようなものこのことである。

それがとくに目立つのは、戴震について述べた部分である。著者は、戴震の仕事は『孟子字義疏証』などの「哲学の著作」と、「すつと型にはまった考証の著作」（“more conventional Kao-cheng work”）の二手に分けてとらえ、戴震自身は前者を自分の真骨頂と考えたが、かれが評判をとったのは後者によってであり、生涯その「こまぎれな考証学」の仕事（“piecemeal evidential scholarship”）と哲学の著作の落差に悩んだ、としているが（P.一八一―二〇、P.二三三）、評者の見方は、それらとはやや異なる。

最後の年（一七七七）に、戴震は死病をおして段玉裁の『六書音均表』を「万疾点定」し（戴震東先生年譜、乾隆四二年条）、『声韻考』（絶筆）を書いたが、これらはともに「文献学」の範疇に属する仕事である。それは、戴震の「文献学」そのものに対する姿勢が、常套的なことの本意とはずれた繰り返しなどでなく、かれの全人的な思想をこめたものであることを表すように、評者には思える。

戴震の例ほど極端でなくても、考証学者たちの「文献学」に対する自己投入には、他にも多くの例がある。評者は、すぐれた知性たちの、そういういけしい自己投入の対象であつた（それがなぜなのか）、考証学者たちの内面にまでさかのぼった本質のところは、いま明確にし得ないが）ところに、考証学の、単なる技術学ではない

重さを見る。評者自身も考証学の研究を手がける者であるが、その主な動機も、このことにある。

「文献学」に打ち込むことが何かの手段である、ということのほかに、考証学者たちが「文献学」を追求するすがたの中に、いま明確な言葉で言い表わすことができないが、精神性が在るように思えてならない。「文献学」とは、そのようなものとして語られなければならないと評者は考えるが、本書は、この点では物足りないもののように思われた。

もう一つは考証学研究の方法の問題である（そして、以下の問題と同じことは、たとえば評者自身の研究についてもいえる）。考証学を対象とする場合、立論のために援引する原資料が、考証学の著書の序・跋やそれに類するものに偏りがちであるが、本書の場合も、必ずしもこのことを免れていないように思う。

たしかに序・跋の類は、考証学者たちの書き遺したもののなかでは、もっともその人の学問の理念が直の言葉で書かれていると思われるものである。しかし、それらは多分に理念の表明であつて、必ずしも学問の内実を表現してはいない。かつ、考証学者たちの学術の結晶は、何より著書それ自体である。序・跋の類の点線による立論は、対象のリアルな扱ひだしという点で十分とは言えない。けれども、それでは考証学の著書の全体をどう読み、論のなかにどう組み入れてゆくか、それは考証学のような理式の学問を研究することに固有の、非常に困難な問題であり、方法論の摸索・検討がぜひ必要である。

念するようになった」と自身で述べた文章がある(8)。実際に、崔述の文集である『無間集』を見ると、「救世策」に始まるその内容は、他の江南の考証学者たちのものと比べて異色な点が多い。この多様な関心を、経学それも考証学へと収斂させていった軌跡の、主体的・自発的側面を明らかにすることができれば、それは考証学を解明する有力な手がかりになるように思えてならない。崔述という個の内部での考証学の成立過程を知ることが、考証学の総体の成立の動機を知る助けになるのではないかと考えるからである。

巻末の文献目録を見ると、本書が跋文の論説に加え、とりわけ戦前から近年までのわが国の中国研究の成果を、数多く渉猟したうえで書かれたものであることがわかる(9) (P.VII参照)。

本書は全体を通じて、それらの二次資料の引用(特にそれが所論の勘どころと思われる部分に嵌入される形で援引されているもの)がかなり多いという印象がある。しかし評者はそれを、むしろ個々の論点について既往の言及を精査し、鋭敏な問題意識をもってそれらの論説にあたり、その見逃しがちな細かい指摘からも触発を得て所論を構築してゆくという、好ましい姿勢の現われとみる。

エルマン氏の *From Philosophy to Philology* は、今後も積み重ねられてゆくであろう清代学術研究の進展の中で、必ず里程碑としての地位を長く保つ著作であると思う。

注

(1) ベンジャミン・A・エルマン氏(一九四六年生)は、現在

幸い、本書にはこの問題について有力な示唆を与える部分がある。その例として、王鳴盛『尚書後案』全書中の、前漢期訓詁資料の利用を、考証学の後漢期経学から前漢期経学への関心の推移、および清代後期今文経学の求しと捉えた指摘(P.二〇八)や、匠元の最後の十年間の学問にみられる「哲學」的なテーマの強調を、一九世紀の儒学のディスタール内部の緊張状態を示すものと位置づける指摘(P.二四六)などが、善げられると思う。

次に、個々の言及について、(問題点の選び出しがたが評者の現在の関心に偏しているかもしれないが)一つを取り上げて問題提起する。

著者は、崔述の著書は考証学の最前列に置かれるべきものであったが、かれが河北の人で考証学の中心地の江南から離れていたため、それらが伝わりにくく無視されていた、しかし崔述の学問と考証学の先人たちの学問との、取り組みかたの統一性は、一八世紀に考証学の方法がとれはと広域に影響を及ぼしたかを表わすものだ、とする(P.二三四)。

この指摘は一定の妥当性をもつ。しかし、崔述が面識のあつた、われわれにとつても知名の考証学者は、孔維翰一人だけだったと言われる(1)。評者は、崔述の考証学は、外からの影響だけでなく、特に主体的・自発的な動機があつて成立した、特異な例であるように思う。

崔述の教養の養地は、むしろ宋学的であつたと思われる。そして、三十歳ころまでは関心の対象が教養であつたが、それ以後経学に専

アメリカ合衆国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)歴史学部教授。氏は一九七三—七四年の台湾留学中に清代学術研究を開始されて以後、この研究に専念されている。本書の基になったのは、ペンシルヴァニア大学に提出された氏の博士學位(PH.D.)取得論文「新儒学の解体—晚期中華帝国の江南学術コミュニティ—」(『The Unravelling of Neo-Confucianism; The Lower Yangtze Academic Community in Late Imperial China,』1980)である。本書のほか、本稿末尾に掲げた著作目録(抄)を見るとおり、氏はこの研究対象について最近十年間に十数件の論文を発表しており、また本年公刊予定の著書に、常州今文学派を対象にした *Classicism, Politics & Kinship: The Ch'ang chou New Text School of Confucianism in Late Imperial China* がある。

- (2) わが国では近藤光男著『清朝考証学の研究』(研文出版、一九八七年)が公刊された。該書は、邦文文献中従来に無い、この対象の大部の専著である。
- (3) 本書中の本概念の使用は、シニール・フーロー著 *L'Archéologie du Savoir*, 1969. 『知の考古学』、中村雄二郎訳、河出書房新社、一九八一)に因る。
- (4) 一例として、たとえば崔述(本稿三三四頁以下参照)の言葉に「一日の中で朝にまざる時はない、一年中で春にまざる季節はない、人の一生で幼児にまざる年頃はない。…人と物が多くなり、ものごとがこみいったものになつたということ

では昔を上回りもしようが、かたや「氣」は純粹さを失い、治政は高懸を失つてゆくばかりである。ちよと季節が春から夏へ進むと、日増しに生き物の数が増えるのにつれて毒虫の害も多くなり、人が子供から大人の年頃に入ってゆくと、日増しに世智にたけて不審な行いもひどくなるようなものだ（日長良於日、歳長良於春、人長良於孺子。…生聚之蕃、文物之盛未必不過於昔、而其氣益昏而雜、其治益卑而薄。猶之自春徂夏、物生日衆而毒孽亦日多、自少及壯、人知日開而妄詐亦日甚也）（『補上古考信錄』卷上、一九八三年上海古籍出版社刊『崔東澗遺書』P.二八）がある。これは一種の文明觀（しかもかなり誇張された）であり、學問について述べた文脈ではないが、この問題を考える上でも示唆的な例文ではないだろうか。

- (5) 著者に“Yen Jo-chü's Debt to Sung and Ming Scholarship”, *Ch'ing-shih wen-t'i* (『清史問題』), Vol.3, No.7 (November 1977). (「閩君麈の宋明儒學に対する依存」瀆口富士雄訳、『斯文』第八二号、一九七九年三月)の論考がある。エルマン氏の著作目録によると、これは氏の最初の公刊論文である。
- (6) もっとも端的にはP.二七—二九の一段(“The Aims of Evidential Research”)に述べられている。
- (7) 胡適・胡景翼「科学の古史家批判」乾隆三四年条(『崔東澗遺書』P.九七〇)。
- (8) 『無聞集』卷三「字重公常書」(在北京時重夢實、山莊地

志種諸術教之書皆雜陳於几前、既汎濫無所歸、又性善忘、過時即都不得復憶、近三十歲始漸自憤、專求之於六經、不敢他有所及(『崔東澗遺書』P.七〇五)。

- (9) エルマン氏は一九七七年(東京)、八二—八三年(京都大学人文科学研究所外国人研究員)の二次にわたって日本に滞在し、わが国の中国研究文献を調査されている。

本書に対する既出の書評で、評者が目撃したものを掲げる。黄進興(台湾)、『漢学研究』第四卷第一期(一九八六年六月)、P.三三九—三四三。

T. H. Barrett (英国), *Journal of the Royal Asiatic Society* (January 1986): P.164.

Stephen W. Durrant (米国), *Journal of the American Oriental Society*, Vol.107, No.2 (April-June 1987): P.346-47.

Michael Quirin (西独), *Monumenta Serica*, Vol.37 (1986-1987): P.355-59.

エルマン氏の既刊・近刊の論著には、次のものがあつた(公刊母片題)。

—単行書—

*From Philosophy to Philology: Social and Intellectual Aspects of Change in Late Imperial China*. Council on East Asian Studies, Harvard University, 1984.

*Classicism, Politics & Kinship: The Ch'ang-chou (杭州) New Text School of Confucianism in Late Imperial China*. University

of California Press, 1990.

—論文—

“Yen Jo-chü (閩君麈) 's Debt to Sung and Ming Scholarship”, *Ch'ing-shih wen-t'i* (『清史問題』), Vol.3, No.7 (November 1977).

“Japanese Scholarship and the Ming-Ch'ing Intellectual Transition,” *Ch'ing-shih wen-t'i* Vol.4, No.1 (June 1979).

“The Hsueh-hai T'ang (学海堂) and the Rise of New Text Scholarship in Canton,” *Ch'ing-shih wen-t'i*, Vol.4, No.2 (December 1979).

“Wang Kuo-wei (王國維) and Lu Hsun (魯頌): The Early Years,” *Monumenta Serica*, Vol.34 (1979-80).

“Ch'ing Dynasty ‘Schools’ of Scholarship,” *Ch'ing-shih wen-t'i*, Vol.4, No.6 (December 1981).

“From Value to Fact: The Emergence of Phonology as a Precise Discipline in Late Imperial China,” *Journal of the American Oriental Society*, Vol.102, No.3 (July-October 1982).

“Geographical Research in the Ming-Ch'ing Period,” *Monumenta Serica*, Vol.35 (1981-83).

“The Unravelling of Neo-Confucianism; From Philosophy to Philology in Late Imperial China,” *Tsing-hua Journal of Chinese Studies* (『清華學報』), New Series 15, Nos.1-2 (December 1983).

“Nietzsche and Buddhism,” *Journal of the History of Ideas* Vol.44, No.4 (October-December 1983).

“Philosophy (J-li 義理) Vs. Philology (K'ao-cheng 考證): The Jen-hsin Tao-hsin (尽心知性) Debate,” *T'oung-Pao* (『通報』) Vol.69, Livr.4-5 (1983).

“The Ch'ang-chou New Text School: Preliminary Reflections,” *Conference Volume for the Conference on Statecraft Thought in Early Modern China* (『明清中國經世思想研討會論文集』) (Institute of Modern History, Academia Sinica 中央研究院近代史研究所, Taiwan, 1984.4).

“Criticism as Philosophy: Conceptual Change in Ch'ing Dynasty Evidential Research,” *Tsing-hua Journal of Chinese Studies*, New Series 17, Nos.1-2 (December 1985).

“Scholarship and Politics: Chuang Ts'un-yü (莊存中) and the Rise of the Ch'ang-chou (杭州) New Text School,” *Late Imperial China*, Vol.7, No.1 (June 1986).

“Confucianism and Modernization: A Reconsideration,” *Conference Volume for the International Conference on Confucianism and Modernization*. (Freedom Council, Taiwan, 1987).

“The Relevance of Sung Learning in the Late Ch'ing: Wei Yuan (魏源) and the Huang-ch'ao ching-shi wen-pien (『皇朝經世文編』),” *Late Imperial China*, Vol.8, No.2 (December 1988).

“Imperial Politics and Confucian Societies in Late Imperial China: The Hanlin (翰林) and Dong-lin (東林) Academies,” *Modern China*, Vol.15, No.4 (October 1989).